様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　６月２３日現在

機関番号：１１３０２
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号：２０５３０８６９
研究課題名（和文）　スポーツ・リテラシー形成に寄与する体育カリキュラム・マネジメントの国際比較研究

研究課題名（英文）　A Comparative Study on PE Curriculum Management to contribute to foster Sport Literacy

研究代表者
黒川哲也（KUROKAWA TETSUYA）
宮城教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：５０３９０２５８

研究成果の概要（和文）：本研究課題においては，体育科で児童・生徒に保証すべき学力をスポーツ・リテラシーと捉え，その形成に寄与する体育カリキュラムの設計・実施・修正の内容と方法（カリキュラム・マネジメント）に関して東アジア諸国・地域との比較研究を行った．対象国・地域のナショナル・レベルにおけるカリキュラム・マネジメントの柱としての養成段階及び現職段階における体育教師教育カリキュラムの特徴と共通した課題を明らかにした．

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to compare the contents and method of PE curriculum management between the East Asian countries/districts, considering Sport Literacy as the intelligence and skills assured in PE classes to all students. We made it appear the characteristics of and common issues among pre-service and in-service PE teacher education curriculum of each countries/districts.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
2009 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・教科教育学
キーワード：スポーツ・リテラシー，カリキュラム・マネジメント，スポーツ教育学，学習到達度

１．研究開始当初の背景

今日，スポーツ・リテラシーが豊かな生活を享受する上で不可欠のものとして認知されている．ところが，我が国を含めた東アジア各国に注目すると，生活様式の急激な変化にともない，子ども・青年の健康・体力や社会的交際能力等の低下，言ってみれば「スポーツ・リテラシーの土台の崩れ」ともいえる現象が共通の問題として顕在化してきている．こうした中で，スポーツ・リテラシーを育成するためのカリキュラム改革が東アジア各国で実施されているが，その前提にはそれぞれの国の子ども・青年の生活現実と健康・スポーツに関する学習到達度についての精密な実態把握が不可欠である．その上で，把握された実態から導かれた教育課題に応

えうるカリキュラムの内実とその開発−実施−評価を遂行するためのカリキュラム・マネジメント・システムが求められることになる．特に，学校の教育計画レベルおよび教師の実践レベルのカリキュラム・マネジメントのあり様は，子ども・青年の学習到達度を直接的に規定する要因として重要であると考えた．

２．研究の目的

本研究課題においては，東アジア各国のカリキュラム・マネジメントの実態を「全国・地域の政策・行政レベル」「学校の教育計画レベル」「教師の実践レベル」に区分して調査・比較し，スポーツ・リテラシーの形成に寄与するカリキュラムの内容とカリキュラム・マネジメントの望ましいあり方について明らかにすることを目的とした．

３．研究の方法

本研究では，各国のカリキュラム・マネジメントの実態を調査・比較することとした．そのために，ナショナル・カリキュラムに示された体育科の目標・内容・方法の構造分析や現職教師教育の内容と組織，カリキュラム実施のための行政組織など「全国・地域の製作行政レベル」におけるカリキュラム・マネジメントの実態を先行研究のレビュー，現地研究者・行政担当者へのインタビューなどを通じて明らかにすること，「学校の教育計画レベル」のカリキュラム・マネジメントの実態を明らかにするために，学校カリキュラムの構造分析及びカリキュラム・マネジメントを支える諸条件の実態を学校長や担当教諭に対する質問紙調査やインタビューを実施すること，Complex Method による授業分析や担当教諭に対するインタビューを通じて，「教師の実践レベル」でのカリキュラム・マネジメントの実態を明らかにすることを目的とした．

４．研究成果

（１）課題遂行にあたっての前提的知見

本研究課題を遂行するにあたっては，その前提として各国・地域の体育カリキュラムが児童・生徒にどのようなスポーツ・リテラシーを保障し得ているのか，またそれはどのような体育授業を通して実現されているのかを明らかにすることが必要であった．

実際，東アジア地域の国・地域においては，ナショナル・レベルの体育カリキュラムの目的・内容の達成度を確かめるシステムを用意している．日本においては，教育課程の実施状況調査，韓国においては「教育課程評価院」による調査と報告，中国においては体育カリキュラムの実施に当たって，実験とパブリックコメントの収集を繰り返しながら実施地域を漸次的に拡大していくといった方式が採られている．

しかしながら，これらの地域においては，こと体育科に限って言えば，調査対象の選定や調査内容に関わって，体育カリキュラムの実施状況を確実に捉え，カリキュラム改訂へ向けた基礎資料として有益な知見を得ることができていない．そこで，本研究課題においては，研究代表者及び共同研究者が実施した東アジア地域における子どものスポーツ・リテラシー形成に関する国際比較研究において実施した調査研究を前提として考察した．考察の結果以下のことが明らかにされた．

①児童・生徒の体育授業における学びの経験及び学習成果を捉えるために，「体育授業に対する態度」，「運動有能感」，「体育授業に対する愛好的態度」の各調査結果を見ると，学校階梯間の接続について，国・地域によって傾向の差はあるものの，何等かのギャップの存在が明らかにされた．

②加えて，各調査項目の結果を男女で比較してみると，中学校・高校段階で有意な差が顕在化する傾向が見られた．つまり，体育カリキュラムにおけるジェンダー・バイアスの存在が推察された．

（２）東アジア地域における体育カリキュラムの共通性と差異及び課題

以上のような前提的知見にもとづいて，東アジア諸国・地域における体育カリキュラム・マネジメントの実態を明らかにするために，まず，各国・地域の体育カリキュラムの共通性と課題を明らかにした．

中国・韓国・台湾を対象として，1990 年代の終わりから相次いで改訂されてきている体育カリキュラムの目標・内容・方法の構造の比較・分析を行った．

これらの国・地域における体育カリキュラムの共通性としては，

①身体及び心の「健康」に関する目標・内容が（一層）重視される傾向にあること，

②知識や技術の活用力，創造的思考力，コミュニケーション能力など「高次の学習能力」が重視される傾向にあること，

③目標の「水準レベル」や「分段能力指標」にみられるような目標の「行動目標化」の傾向があること，

④児童・生徒の興味や技能の差など個人差二応じた指導を強調する傾向にあること，

⑤評価の観点及び評価方法の多元性・多様性が強調される傾向にあること，が明らかにされた．こうした傾向は日本も含めて東アジア地域における体育カリキュラムに共通する傾向であることが明らかにされた．

また，体育カリキュラムの課題としては，体育授業において形成がめざされるスポーツ・リテラシーを「知識・技能」「思考・判

断あるいは認知スキル・学習スキル」「価値意識・態度」の３つの要素から構成されるものとして捉えた場合，これら３つの要素の形成を体育授業の目標として設定することの妥当性が認められる一方で，これらの目標のうち，特に「価値意識・態度」に関わる目標を「行動目標化」することが果たして妥当かどうかを検討する必要が示唆された．つまり，ナショナル・カリキュラムのレベルで「認知スキル・学習スキル」や「価値意識・態度」目標を「行動目標化」することが，教師の日々の実践＝カリキュラム・マネジメントを拘束し，授業スタイルの画一性を高めることにつながる危険性を十分に検討する必要があることである．他方，こうした「行動目標化」が児童・生徒の学習行動の変容を引き出す反面，スポーツに対する「価値意識・態度」の自己形成を促す上で不可欠となる体育授業における彼らの「自由な表現」を抑制する可能性について検討する必要がある．こうした観点は，児童・生徒の学習評価に関わって，情意目標の到達目標化が進められようとしている中で，その妥当性を検討する上で重要な観点だと考える．

（３）体育授業におけるスポーツ・リテラシーの獲得状況と教師の指導性の関連についての調査研究

先に示した本研究課題の前提的知見は，体育授業における児童・生徒が獲得した学習成果及び学習への構えと教師の指導性との関係について考察されている．

そこでは，１学習成果と学習への構えとの関係，２．学習への構えと教師の指導性との関係が考察された．まず，１．学習成果と学習の構えとの関連については，クラスター分析の結果「消極的参加型」「息抜き志向型」「学習志向型」「授業回避志向型」の４つに分類された学習への構えと学習成果との間に有意な相関が見られ，「学習志向型」「息抜き志向型」「消極的参加型」「授業回避型」の順に高い学習成果を身につける傾向が見られた．また，２．学習への構えと教師の指導性との関係については，クラスター分析の結果「教え−学び乖離型」「授業不成立型」「教育内容不在型」「自己ペース型」「教え−学び融合型」に分類された教師の指導性タイプと有意な相関を示し，「教え−学び融合型」「自己ペース型」「教え−学び乖離型」「授業不成立型」「教育内容不在型」の順に，望ましい学習への構えと考えられる「学習志向型」を生み出すことが示唆された．

なお，上に示した体育授業における学習成果及び学習の構えと教師の指導性との関連についての調査は，日本の小学校を対象としており，2010 年に同様の調査を複数の国・地域において実施し，現在データの分析を進めており，2011 年度以降成果を公表する予定である．

（４）現職段階における体育教師教育カリキュラムの実態

以上のような前提的知見にもとづいて，本研究課題の遂行にあたっては，養成段階及び現職段階における体育教師教育カリキュラムに着目し，東アジア各国・地域の比較・分析を行った．

先行研究の分析及び現地研究者へのインタビュー（中国；北京師範大学・毛振明教授，韓国；釜山大学校・黄泳性教授）を通じて以下のことが明らかにされた．

中国においては，現職教師教育は「学歴培訓」（学歴の取得を目的とした研修）と「非学歴培訓」に区分され，後者については「新任教師培訓」「教師崗位培訓」「骨幹教師培訓」「班主任培訓」「専項培訓」などが実施され，それぞれ最低履修時間数が占めされており，昇級・昇進の基礎的条件とされている．また，前者については「教育学院」を中心とした研修が実施されており，これ以外にもいわゆる「内地留学」にあたる「国内訪問学者」制度が用意されている．また，教育委員会の主事に対する研修も実施されており，数ヶ月間学校現場に勤務し，職場における研修を指導することを内容としている．

現職教師教育の背景には，教員免許が「三級→二級→一級→高級」という形で階層化されており，年齢および教育論文，研修の受講時間等を教育委員会が審査し，免許種別を認定するというシステムの整備が存在している．

韓国においては，委託研修・職務研修・資格研修・特別研修など多様な研修が現職教師教育として用意されているが，その背景には，「教育公務員昇進規定」（教師の昇進評定に資格研修や職務研修の実績を活用する）の制定が影響している．大学卒業時に取得可能な免許は初等・中等とも２級資格であり，「研究」「役職（主任等）」「僻地勤務」などの各領域に設定された基準をクリアすることで１級へと昇級するシステムがとられている．この基準に現職研修の受講が組み入れられており，点数に換算・蓄積され，昇級・昇進の基礎資料とされる．

台湾においては，現職教師は年 18 時間の研修が義務づけられているが，2000 年に公布された「９年一貫カリキュラム」への対応として年 30 時間の研修が義務づけられた．また，研修の形態としては，「国内外での勤務」「学位の取得」「特定主題の研究」などを「全時」「部分出勤」「休暇」「出勤時間外」「修学休業」など多様な形態で実施することとなっている．

これらの国・地域の現職教師教育カリキュ

ラムは，教師の待遇や昇進・昇級と結びつけられており，ある意味国家の強力なマネジメントのもとにおかれている．日本の場合にも教員研修は義務づけられているが，昇進や昇給と直接結びつけられているわけではない．こうした研修の位置づけの違いが，具体的な学校レベルあるいは教師の実践レベルのカリキュラム・マネジメントにどのような影響を与えているのかを明らかにすることが残された課題である．

（５）カリキュラム・マネジメントの一つの柱としての体育教師教育カリキュラムの国際比較研究

養成段階における体育教師教育カリキュラムについて，各国・地域の現地研究者より具体的な養成カリキュラム（シラバス）の提供を受け，日本における体育教師教育カリキュラムとの比較・検討を行った結果，以下のことが明らかにされた．

比較・検討の対象とした韓国及び台湾の体育教師教育カリキュラムにおいては，各種スポーツ種目あるいは個別スポーツ科学に関する知識・技能を獲得することが重視されており，その傾向は中等学校体育教師教育の場合顕著であった．具体的には，韓国においては 66 科目が，台湾においては 96 科目が専門選択科目として開講されていることに見られるように，多様かつ多数の科目の設置によって上の要求に応えようとしている．

これに対して日本においては，予算の削減，教員定数の削減，事務的業務の増大などによって専門科目の減少傾向が見られ（選択科目は 16 単位の修得が求められている）．この点については，韓国・台湾の場合と対象的であった．

しかし問題は，それぞれの国・地域において改訂された体育カリキュラムの要求と体育教師教育カリキュラムとの間にギャップが存在することである．つまり，韓国・台湾においては学校体育カリキュラムが身体活動に関する知性と諸能力の形成をめざしているにもかかわらず，体育教師教育カリキュラムにおいては旧来型の各スポーツ種目・個別スポーツ科学二関する知識を技能の獲得が求められている．対して日本においては，学校体育カリキュラムにおいてスポーツに関する基礎的な知識・技能の獲得を促進することが目指されているにもかかわらず，専門科目の開講数の減少によって，身体活動に関する豊かな教養を身につける機会を保障されていない．

こうした東アジア諸国・地域における共通した課題に対しては，体育教師教育カリキュラムにおいて，各教科で学ぶ知識や技能を概括する機会を保障すること，さらにはスポーツに対する多様なアプローチを可能とする専門的知識や技能の再構成の機会を保障することが求められる．そのためにも，教材に対する多様なアプローチ（歴史学的，社会学的，技術学的など）を統合し，「教科内容構成」を中心課題とする科目の設置が検討される必要がある．

また，学校階梯間にギャップが存在するという学校体育カリキュラムの課題からすれば，初等教育段階，特に高学年における「体育の専科制」の導入が検討される必要があるとともに，初等教育段階における学校体育カリキュラム固有の課題とそれを担いうる体育教師の固有の専門性が明らかにされる必要がある．

さらに，教師の指導性タイプと児童・生徒の学習成果及び学習への構えとの間には，より高い学習成果を生み出す「正のスパイラル」ともいえる三者関係と逆に学習成果の獲得を疎外する「負のスパイラル」ともいえる三者関係が見られたことからすると，養成段階の体育教師教育カリキュラムにおいては，１．教科内容・教材についての豊かな専門的教養を学生に保証する必要があること，２．大学において保証すべきミニマム・エッセンシャルズとしての教授知識と教授スキルを明確に設定する必要があること，さらに，３．講義，演習（模擬授業）や教育実習におけるメンターを交えた集団的な省察活動では，教授知識や教授スキルの向上のみに焦点づけられるのではなく，教師の指導観の修正・発展につながるような内容と形式の基で行われる必要があること，が課題として示唆された．

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

① Tetsuya KUROKAWA, Yuzo UNNO, Noriko NAKASHIMA, Junichi KANEGAE, Takashi KUCHINO, Shinjiro TANAKA, Sport Literacy as the Core Concept of teachers' specialty in P.E. : Teacher Education curriculum design to ensure the teacher specialty,宮城教育大学論集第７巻,査読無, 2011, 51-65.

②鐘ヶ江淳一，海野勇三，中島憲子，黒川哲也，現代日本における小学校体育授業の現実−学習成果・学習への構え・教師の指導性タイプとの関連から−，日本スポーツ教育学会第 30 回記念国際大会予稿集，査読無，2010, 311-316.

③ Yuzo Unno, Noriko Nakashima, Tetsuya Kurokawa and Jun-ichi Kanegae, Urgent Issues in Actual Condition of Physical Education Class in East Asia :

Inter-School Stage Disconnection, Gender Bias and Sense of Value to PE,日本スポーツ教育学会第 30 回記念国際大会予稿集，査読無，2010，283-288.

〔学会発表〕（計 10 件）
①Noriko NAKASHIMA, Yuzo UNNO, Tetsuya KUROKAWA, A Re-examination of Teacher Specialty on Primary School Teacher Education : Issues of the Teacher Pre-service Education Curriculum in Terms of a Charge System, The 2nd East Asian International Conference on Teacher Education Research ; Hong Kong Institute of Education, 2010 年 12 月.
② Tetsuya KUROKAWA, Yuzo UNNO, Noriko NAKASHIMA, Sport Literacy as the Core Concept of Teacher's Specialty in P.E. : Teacher Education Curriculum Design to Ensure the Teacher Specialty, The 2nd East Asian International Conference on Teacher Education Research ; Hong Kong Institute of Education, 2010 年 12 月.
③ Yuzo UNNO, Tetsuya KUROKAWA, Noriko NAKASHIMA, Issues of Teacher Education in Terms of A Survey on lerning in P.E. : For Building Up A Pedagogical Belief and A View of Teacher as A Basis of Teachers' Specialty, The 2nd East Asian International Conference on Teacher Education Research ; Hong Kong Institute of Education, 2010 年 12 月.
④鐘ヶ江淳一，海野勇三，中島憲子，黒川哲也，現代日本における小学校体育授業の現実−学習成果・学習への構え・教師の指導性タイプとの関連から−，日本スポーツ教育学会第 30 回記念国際大会：国立オリンピック記念青少年総合センター，2010 年 10 月.
⑤Yuso Unno, Noriko Nakashima, Tetsuya Kurokawa, Junichi Kanegae, Urgent Issues in Actual Condition of Physical Education Class in East Asia : Inter-School Stage Disconnection, Gender Bias and Sense of Value to PE,日本スポーツ教育学会第 30 回記念国際大会；国立オリンピック記念青少年総合センター，2010 年 10 月.
⑥海野勇三・黒川哲也・中島憲子・鐘ヶ江淳一・口野隆史，「東アジア型」体育授業とカリキュラムの改革課題，日本体育学会第 60 回記念大会：広島大学，2009 年 8 月.
⑦黒川哲也・中島憲子・海野勇三・鐘ヶ江淳一・口野隆史・田中新治郎，スポーツ・リテラシー形成に寄与する体育カリキュラム・マネジメントの国際比較研究（１）−東アジア地域における体育カリキュラム改革の共通性と差異−，日本体育学会第 60 会記念大会：広島大学，2009 年 8 月.
⑧海野勇三・中島憲子・鐘ヶ江淳一・黒川哲也・口野隆史，現行学習指導要領下の小学校体育授業の実態―子どもの学びの経験・履歴と学習成果の関連に着目して―，日本スポーツ教育学会第 28 回大会：奈良教育大学，2008 年 10 月.
⑨中島憲子・海野勇三・鐘ヶ江淳一・黒川哲也・口野隆史・黄泳性・権五輪，今日の韓国における体育授業およびカリキュラムの現状と課題―児童・生徒への複合的実態調査の結果から―，日本スポーツ教育学会第 28 回大会：奈良教育大学，2008 年 10 月.
⑩鐘ヶ江淳一・海野勇三・中島憲子・黒川哲也・口野隆史・李勝雄，今日の台湾における体育授業およびカリキュラムの現状と課題−児童・生徒への複合的調査の結果から−−，日本スポーツ教育学会第 28 回大会：奈良教育大学，2008 年 10 月.

〔図書〕（計 0 件）
〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

６．研究組織
(1)研究代表者
黒川　哲也（KUROKAWA TETSUYA）
宮城教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：5030869

(2)研究分担者
海野　勇三（UNNO YUZO）
山口大学・教育学部・教授
研究者番号：30151955

鐘ヶ江　淳一（KANEGAE JUN-ICHI）
近畿大学九州短期大学・保育学科・教授
研究者番号；90185918

田中　新治郎（TANAKA SHINJIRO）
武庫川女子大学・文学部・教授
研究者番号；70197432

中島　憲子（NAKASHIMA NORIKO）
中村学園大学・人間発達学部・講師
研究者番号；00301721

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：